

ナヴァーイーにおける翻訳
——『友愛のそよ風』を例に——

'Alī Shēr Nawā'ī as Translator :
Analysing *Nasā'im al-mahabba* Against Its Persian Original

菅原 睦
Mutsumi SUGAHARA

Abstract In this paper, we consider 'Alī Shēr Nawā'ī's *Nasā'im al-mahabba*, a collection of biographies of Islamic saints. It is widely recognized as a Chaghatay Turkic translation of 'Abd al-Raḥmān Jāmī's *Nafahāt al-uns*, originally written in Persian. However, detailed comparison between the two texts has not been carried out.

To begin with, we argue that this text is not necessarily addressed to those who do not understand Persian, for the following reasons: 1. Persian was undoubtedly a *lingua franca* in the Timurid society, where Nawā'ī created his literary works; 2. When necessary, the author often asks the reader to consult the original Persian text; 3. Most of the verse quotations contained in the Persian text are rendered in their original form with no translation.

Further, the structures of the two texts are compared, focusing on those biographies added by Nawā'ī, together with their possible sources.

Our analysis suggests that what Nawā'ī intended to reproduce in the *Nasā'im al-mahabba* was not so much the contents of the original Persian text itself, but rather the literary activity of Jāmī, who composed his *Nafahāt al-uns* as a continuation of the biographical tradition going back to eleventh-century Sulamī's *Ṭabaqāt al-Ṣūfiya*.

Keywords Nawā'ī (ナヴァーイー), Chaghatay (チャガタイ語), Jāmī (ジャーミー), Persian (ペルシア語), translation (翻訳)

はじめに

中央ユーラシアから西アジアの各地でペルシア語（近世ペルシア語）が有力な文章語としての地位を得たことに伴って、これらの地域では13・14世紀以降ペルシア語作品に基づくチュルク諸語への翻訳作品が作り出されることになった¹⁾。それらをそれぞれの原典であるペルシア語テキストと詳細に対照することは、チュルク語作品の本文を正しく確

1) 中央ユーラシアにおけるいくつかの作品例については菅原2009:134-144;2011を参照。なお以下本稿では「模作」にあたるものも含めて「翻訳」と呼ぶことにする。

定し²⁾その言語の語彙や文法について有益な情報を得るために重要であるばかりでなく、どういう作品がどのように翻訳されたかという観点から、翻訳当時の当該地域の言語状況の解明にも大きく貢献することが期待される。にもかかわらず、特に中央ユーラシアにおけるペルシア語からチュルク語への翻訳文献がこのような考察の対象にされることはまれである³⁾。

本稿で取り上げるのは、ティムール朝時代の高名な文人ミール・アリーシール・ナヴァーイー Mir 'Alīšēr Nawā'ī (1441-1501) がチャガタイ語で著わした聖者の評伝『友愛のそよ風』 *Nasā'im al-maḥabba min šamā'im al-futuwwa* である。ナヴァーイーの散文作品の中で最も多くの葉数をもつこの作品は、ジャーミー Nūr al-dīn 'Abd al-Rahmān Jāmī (1492 年没) のペルシア語による『親愛の息吹』 *Nafahāt al-uns min ḥaḍarāt al-quḍs* に基づくものであるが、両作品を対照した研究は知る限り発表されていない⁴⁾。ここでは、ペルシア語原文との詳細な対照に先立って、構成面での原作との対応関係を整理し、あわせてチャガタイ語作品『友愛のそよ風』の性格の一端を明らかにしたい。

I 作品の概要

『友愛のそよ風』がジャーミーのペルシア語による『親愛の息吹』の「翻訳」として執筆された経緯については、著者自身が序文⁵⁾の中で次のように述べている。

チュルクの人々のある者は、(...) この言葉 [ペルシア語] に十分に通じていないためにこの恩寵を得られず、この真理の精妙さが彼らに知られていない。この卑しい者 [ナヴァーイー] は、もし努力すればこの書 [『親愛の息吹』] をチュルク語に翻訳できるだろうか、その精妙さと難解さとをより明瞭な言葉でもっとわかりやすく述べられないだろうか、と考えていた。この望みと意欲とから自分を抑えることもできず、(とは言え) 事の重大さと困難さとのため開始することもできずにいたが、ついにその時⁶⁾から 20

2) その具体例は註 7 を参照。

3) 先駆的な研究としてナヴァーイーの作品に関する Bertel's 1928 および 1965 をあげることができる。同様の立場による Levend 1965: 75-178, 237-238 も参照。一方アナトリアにおけるペルシア語からチュルク語 (古アナトリア・トルコ語およびオスマン語) への翻訳については既に Pistor-Hatam 1998, Toska 2000, Hagen 2003 などの重要な研究がある。

4) 本稿で用いた『友愛のそよ風』校訂本の序文 ([Nes. XLVI]) には、言語面でのペルシア語原文の影響に関するごく短い言及が見られる。

5) 序文は独自の内容であり、原作である『親愛の息吹』の序文の翻訳ではない。ただし聖者たちの奇蹟に触れた「アッラーの聖者たちに出現した超常・奇蹟のこと」 *Evliyāu'llāḡa vāki' bolḡan ḡavāriḡ-ı 'ādāt u kerāmāt beyāni* [Nes. 11.9-10] 以下の段は、原作の *al-qawl fi anwā' al-karāmāt wa xawāriḡ al-'ādāt* [Naf. 22.4] に始まる部分の内容をチャガタイ語で再現したものと考えられる。また跋文 [Nes. 455.15-28] も原作のもの [Naf. 633.19-634] とは対応しない。なおペルシア語作品のオスマン語への翻訳でも、序文は通常翻訳されないという [Hagen 2003: 106]。

6) 881 年 [1476/77 年] にナヴァーイーがジャーミーに対して聖者たちの評伝をまとめるよう依頼し、それが『親愛の息吹』執筆の契機となったことを指している。Naf. 2.14-21, Nes. 1.8-15 を参照。

年が過ぎた 901 年 [1495/96 年], 至高の神の御助力により, この大事に着手しこの難業に筆を運ばせた。[Nes. 1.22-2.8]⁷⁾

上の文章からは, ナヴァーイーの意図が, ペルシア語による原作を直接利用できない読者の便宜のためにチュルク語 (ここではチャガタイ語) のテキストを提供することにあつたように読み取れる。しかしここで次のような事情を考慮する必要がある。

1 状況証拠

ナヴァーイー自身が『2つの言語の裁定』*Muḥākamat al-luġatayn* の中で述べていることから窺えるように, 当時の当該地域のチュルク語文人たちはペルシア語・ペルシア語文学に通じていた [cf. 菅原 2009: 142-143]。そもそも『2つの言語の裁定』自体が, ペルシア語がチュルク語話者の間に広く通用している言語状況をふまえて書かれたものである。

2 原作への参照の指示

ナヴァーイーは, 『友愛のそよ風』において原作の内容を省略した場合に, 読者に対して原作への参照を求めていることがある。このような例は 10 か所以上で見出される。

かの御方のことを述べるのに筆は無力である。(ここに) 書かれたよりも詳しいことを望む者は『親愛の息吹』で見るとよい (第 374 段: Alarnıñg zikride qalem 'acızdür, bitilgendin mebsütraq tilegen *Nefehätü'l-üns*'de körsün [Nes. 193.8-9])

それらのいくつかはマフドゥーミー猊下 [ジャーミー] —— 御墓が光に照らされますように —— が『親愛の息吹』で述べておられるので, 読もうと望む者はそこで探せば見出すだろう (第 569 段: Alardın ba'zını Ḥazret-i Maḥdümü nuvvire merkaduhu nüren *Nefehätü'l-üns*'de zikr kılıpdurlar ki tilegen kişi ki okuğay, anda tilese tapar [Nes. 349.20-22])⁸⁾

また序文中で原作が書かれた事情に触れた箇所でも, 「(そのことは) その貴い書物 [『親

7) 本稿で使用した『友愛のそよ風』のテキスト ([Nes.]) は 5 種類の写本に基づく校訂本文であるが, ペルシア語原文との対照を通じていくつかの誤りを指摘することができる。例えば *qarı kaşığa barıp* [Nes. 210.8] と転写されている部分の最初の語は, 対応するペルシア語 *ba muqri' şudamé* [Naf. 338.13] 「クルアーン朗誦者のところに行った」から *qarı* 「老人」ではなく *kâri* 「クルアーン朗誦者」 (<Ar. *qâri*>) と読むべきであることがわかる。同様に *Pir sarı bardım* 「私は導師の方へ行った」 [Nes. 451.20] は *bir sarı bardım* 「私はある方向へ行った」の読み誤りであることがペルシア語原文 *ba yak jānib şudam* [Naf. 629.23] から明らかである。また *anı siver, kişi hiç hâl bile andın ayrılmas* [Nes. 42.16-17] では動詞 *siver* 「好む」の後にコンマが書かれているが, ペルシア語原文 *döstdâr-i way az way ba hêç hâlê judâ namêşawad* [Naf. 64.17-18] の内容と一致するためにはこのコンマは不要で *anı siver kişi* … 「それを好む人は」と読むのが正しい。なお必要に応じて, この校訂テキストでも利用されているバリ写本 [P] およびタシュケントで刊行されたナヴァーイー作品完全全集からの転写テキスト [Nasoyim] を参照した。

8) その他の例: 第 101 段 [Nes. 60.11-12], 第 114 段 [Nes. 65.26-27], 第 267 段 [Nes. 134.26-28], 第 316 段 [155.18-19], 第 511 段 [Nes. 313.9-11], 第 754 段 [Nes. 448.10] など。

愛の息吹』の目録でかの御方 [ジャーミー] —— 御墓が照らされますように —— がその事情を詳述しておられる通りである。読んだ者たちは見たであろうし、読んでいない者たちは読めば見るであろう」 (... oğuşanlar körmiş bolğaylar ve okumağanlar okusalar, körgeyler [Nes. 1.13-15]) と述べられている⁹⁾。このように、翻訳テキストを提供しながら、読者が必要に応じて原作を参照することも期待されているのである。

3 ペルシア語を訳していない部分の存在

原作中に引用されているペルシア語の詩行は、通常は原文のまま再掲されており訳も添えられていない。例：第 330 段 [Nes. 164.16-17]、第 352 段 [Nes. 175.6]、第 432 段 [Nes. 221.2-3]、第 505 段 [Nes. 306.2]、第 716 段 [Nes. 424.6] など¹⁰⁾。また登場人物の発話の一部 (第 367 段 [Nes. 184.26-27]、第 374 段 [Nes. 193.4-6]、第 494 段 [Nes. 291.20-21]、第 586 段 [Nes. 362.18] など) や著作からの引用 (第 440 段 [Nes. 230.5]) がやはりペルシア語のままあげられている例も見られる¹¹⁾。

これらの指摘からは、『友愛のそよ風』が実際にはある程度までペルシア語に通じた読者を想定していたことが窺われる。言い換えれば、この作品は通常の翻訳のように原作を読めない読者にその内容を提供することを第一の目的としたものとは考えにくい。従って序文で述べられていた執筆の経緯も一種のレトリックに過ぎなかった可能性が高く、文字通りに理解すべきものではない¹²⁾。

想定される読者がペルシア語原作を直接利用することも十分可能な状況で書かれたとすれば、この作品は単なる「ペルシア語作品の翻訳」とは異なる独自の性格を備えていたことが考えられる。同じ序文中には『友愛のそよ風』がジャーミーによる原作の内容をそのまますべて再現するのではなく、さまざまな増補や省略を行なったことが述べられている。

そしてシャイフ・ファリードウッディーン・アッタール猯下¹³⁾ —— その秘密が聖化さ

9) さらに第 1 段 [Nes. 13.2-3]、第 7 段 [Nes. 16.19-21]、第 656 段 [Nes. 395.11-13] ではアッタール Farid al-din 'Aṭṭār (註 13 参照) のペルシア語による『聖者伝』 *Tazkirat al-awliyā'* や『鳥の言葉』 *Lisān al-tayr* を参照することが同様に求められている。

10) まれな例外として第 368 段 [Nes. 186.16-17] では原文中のペルシア語の詩行に代えて同じ韻律によるそのチャガタイ語訳があげられている。

11) ジャーミーの原作にはアラビア語で書かれた部分も含まれているが、それらは大部分が原文のまま残されている一方、死去の年を述べる際の定形表現 *tuwuffiya fi sana ...* 「彼は……年に亡くなった」のようにしばしばチャガタイ語に訳されているものもある。

12) Hagen 2003: 130-131 はペルシア語からオスマン語への翻訳作品における類似の表現が「トポス」であった可能性に触れている: 'In other words, the translators' claims that they worked for a public which did not know Persian may be considered as a topos whose actual relevance may be much smaller than we have originally assumed.'

13) Farid al-din 'Aṭṭār (1221 年没)。有名な神秘主義詩人。その『聖者伝』 *Tazkirat al-awliyā'* はペルシア語による代表的な神秘主義者の評伝であるが、『親愛の息吹』執筆の際には利用されな

れますように——が著わされた『聖者伝』から、『親愛の息吹』に含まれていない何名かの偉大な聖者たちを、それぞれ相応しい箇所挿入した。また（原著には）チュルクの導師たちへの言及も少なかったので、導師たちの導師ホージャ・アフマド・ヤサヴィー猯下¹⁴⁾——アッラーの御慈悲がありますように——から今日に至るまで可能なだけ探し求めて、彼らのことを、その行状や言葉のいくつかをそれぞれの項目に書き加えた。またインドの導師たちの記述もわずかしは見られなかったので、可能な限り探し求めて、聖者たちの枢軸シャイフ・ファリード・シャカルガンジ猯下¹⁵⁾——アッラーがその魂を聖化されますように——から近年の導師たちに至るまで書き添えた。さらにマフドゥーミー猯下 [ジャーミー]——御墓が光に照らされますように——の御名前と、同時代の仲間の導師たち——アッラーが彼らの魂を聖化されますように——への言及もその尊い書物にはなかったため、ここに加えた。一方、当代の人たちにさほど必要ではない文言は、冗長さへの懸念から、その書物中のアッラーの聖者たちの記述から割愛しこの翻訳から省略した。[Nes. 2.8-21]

原作の構成に実際にどのような変更が加えられたかを明らかにすることは、『友愛のそよ風』の性格を考える上で重要な手掛かりを提供するものである。以下ではそれぞれの校訂本に基づき、両作品の段構成を比較し対応関係を整理したい¹⁶⁾。

II ナヴァーイー作品に欠けている段

ジャーミーによる原作『親愛の息吹』に含まれる段のうち、以下の6つは『友愛のそよ風』に見られない。

第9段 ユースフ・アスバート Yūsuf Asbāt

第13段 アブー・スライマーン・ダーウード・ビン・ナスル・ターイー Abū Sulaymān Dāwūd bin Naṣr al-Ṭā'ī

第23段 ムハンマド・ビン・ハーリド・アージュリー Muḥammad bin Xālid al-Ājurī

第24段 イブラーヒーム・ビン・シャンマース・サマルカンディー Ibrāhīm bin Šammās al-Samarqandī

¹⁴⁾ かったようである。Mojaddedi 2000: 196, fn. 5 および 2001: 183, note 8 を参照。

14) Aḥmad Yasawī。中央アジアのチュルク系遊牧民へのイスラーム布教に貢献したとされる人物。ただしその従来の人物像に対する批判的な見解として DeWeese 2012 の VI 章, XII 章を参照。

15) チシュティー教団のファリードウッディーン・ガンジ・シャカル Farid al-dīn Ganj-i Šakar (1265 年没) を指す [cf. 矢島 2009: 85; 二宮 2011: 117]。

16) 本文自体の詳細な比較は本稿の考察の対象外とするが、翻訳の際に原作の文章の一部が省略されることはしばしば見られるのに対し、大幅な加筆が認められる段は第460段ホージャ・ウバイドウッラー Ḥāce 'Ubeydu'llāh, 第570段シャイフ・バカー・ビン・バトゥー Şeyḫ Bekā' b. Baṭū などごく少数であることを指摘しておく。

第 34 段 アブー・トゥラーブ・ラマリー Abū Turāb al-Ramālī

第 552 段 シャイフ・アフィーフッディーン・ティリムサーニー Šayx 'Afif al-dīn al-Tilimsānī

『親愛の息吹』校訂本の校異によれば、これらのうち第 9, 13, 24, 552 段はいずれも底本に欠けているという [Naf. 34 fn. 6; 37 fn. 5; 44 fn. 8; 570 fn. 3]。従ってこれら 4 つの段に関してはナヴァーイーが翻訳の際に用いた原本に含まれていなかった可能性が考えられる。残る第 23 段と第 34 段については、これらがナヴァーイー作品に含まれない理由は今のところわからない。

Ⅲ ナヴァーイーによって加えられた段

『友愛のそよ風』のみに見られるため、ナヴァーイーによって追加されたと考えられる段はかなりの数にのぼる。以下、1. 段の分割によるもの、2. アッタール『聖者伝』による追加、3. インドの導師たちに関する情報、4. チュルクの導師たちおよびジャーミーの同時代人に関する情報、5. 詩人たちの部への追加、6. その他、に分けて順に検討する。なお『友愛のそよ風』では、その原作である『親愛の息吹』と同様、本編と付編「女性の聖者たちの部」¹⁷⁾との間を除いて「○○の部」といった区切りは示されていないことに注意されたい。

Ⅰ 段の分割によるもの

第 398 段ウスタード・マルダーン Üstād-i Merdān および第 494 段ホージャ・アブドゥッラフマーン・ガフワラガル Ḥ'āce 'Abdu'r-rahmān-i Gehvāre-ger は、原作中に対応する段をもたない。しかし詳しく見てみると、前者は原作の第 392 段ホージャ・ムハンマド・ビン・アビー・アフマド・チシュティー X'āja Muḥammad bin Abī Aḥmad al-Āḥīdī al-Āḥīdī の後半部分、後者は同じく第 487 段シャイフ・ハーフィズ・バハーウッディーン・ウマル・アバルディヒー Šayx Ḥāfiẓ Bahā' al-dīn 'Umar Abardihi のやはり後半部分に内容が一致することがわかる¹⁸⁾。それぞれの前半部分には『友愛のそよ風』第 397 段および 493 段が対応する。従って、翻訳の際に原作の第 392 段と第 487 段とがそれぞれ 2 つに分割された結果、段の数が増えただけであって、新たな内容の段が加えられたのではない。

17) 『親愛の息吹』の全体的な構成については Mojaddedi 2001 : 152, 166-172 を参照。

18) 前者では Üstād-i Merdān Ḥavāf vilāyetide Sincān qaşabasıdın. Ḥ'āce'nīng müridleridindür [Nes. 205.8-10] 以下と Ustād Mardān - rahimahu Allāh, az qaşaba-i Sincān-i Xawāf az muridān-i X'āja ast [Naf. 329.23] 以下とが、後者では Şeyḫ Ḥāfiẓ 'Ömer rahimehu'llāhu dipdür ki bir vaqt bu vilāyetde 'aẓīm vebā boldı [Nes. 290.25-27] 以下と wa ham way gufta ast ki: waqtē dar in wilāyat wabāyē 'aẓīm uftād [Naf. 452.21] 以下とがそれぞれ対応している。

2 アッターール『聖者伝』による追加

『友愛のそよ風』本文のはじめの部分のうち、第1段から第7段、第10段から第15段までの計13段は『親愛の息吹』中に対応する部分が見られない。これらのうち第13段を除く各段の内容は、その大部分がアッターール『聖者伝』での同じ人物の評伝中に見出される。例えば第1段シャイフ・ウワイス・カラニー *Şeyh Üveys-i Kārenī* の冒頭と、同じ人物の評伝である『聖者伝』第2段の冒頭はそれぞれ次の通りである（対応する箇所を下線で示す）。

『友愛のそよ風』

(1) *qāla Rasūl Allāh shallā Allāh 'alayhi wa sallama Uways al-Qaranī xayr al-tābi 'in bi-ihsān wa 'atf.*¹⁹⁾ (2) *Gāh gāh H'āce-i 'ālem shallā'llāhu 'aleyhi ve sellem mubārek yüzün Yemen sarı kılp dir irdi kim : inni la-ajidu nafas al-Raḥmān min qibal al-Yaman.* (3) *Birevniṅ vaşfi kim anıṅ vaşşāfi H'āce-i kāyināt bolḡay ve nefesi nefes-i raḥmān bolḡay*²⁰⁾, *vaşf kılmak ḡāyet bi-edebliḡ bolḡay.* [Nes. 12.16-20]

(1) アッラーの使徒 —— アッラーが祝福と平安を与えたまいますように —— は言われた：ウワイス・カラニーは後継世代で最も善行と仁愛とにすぐれた者である。(2) しばしば、世界の師はその祝福された御顔をイエメンの方に向けて言われるのだった：まことに私は慈愛あまねき御方 [アッラー] の息吹をイエメンの方より見出す。(3) その讚美者が創造物の長 [ムハンマド] であり、その息吹が慈愛あまねき御方の息吹であるような方の記述を行なうことは無礼の極みであろう。

『聖者伝』

ān qibla-i tābi'in, ān qudwa-i arba'in, ān āftāb-i pinhān, ān ham-nafas-i Raḥmān, ān Suhayl-i Yamanī, Uways Qaranī - raḥmat Allāh 'alayhi -. (1) *qāla al-Nabī - shallā Allāh 'alayhi wa ālihi wa sallama - : Uways al-Qaranī xayr al-tābi'in bi-ihsān.* (3) *vaşf u sitāyiş-i kasē ki sitāyanda-i ō raḥmat li-l-'alamīn ast, ba zabān-i man kujā rāst āyad?* (2) *gāh-gāh x'āja-i 'ālam - 'alayhi al-şalawāt wa al-şalām - rōy sūy-i Yaman kardē wa guftē : inni la-ajidu nafas al-Raḥmān min qibal al-Yaman. ya'nī nafas-i Raḥmān az jānib-i Yaman hamēyābam.* [TA 19.3-8]

各段の『聖者伝』との対応関係は以下の通りである。

[Nes.]	[TA]
第1段 シャイフ・ウワイス・カラニー <i>Şeyh Üveys-i Kārenī</i>	第2段 (19.4-29.1)
第2段 ハビーブ・アジャミー <i>Ḥabīb-i A'cemī</i> ²¹⁾	第6段 (59.5-65.21)

19) 以下 [Nes.] でアラビア文字のまま印刷されている部分は引用者の転写により斜体で示す。

20) エディションは *nefsi nefes-i raḥmān bolḡay* とするが、パリ写本 [P26a4] で先行するアラビア語文に付されている母音記号に従い *nefs* を *nefes* (*nafas*) に改める。

21) この語はパリ写本 [P26a17] でも初頭にアリフが書かれているが、ここではより一般的な TA

- | | | |
|------|---|----------------------|
| 第3段 | アブー・ハーズィム・マッキー Ebū Ḥāzim-i Mekki | 第7段 (67.5-13) |
| 第4段 | ウトゥバ・ビン・グラーム 'Atebe b. Ġulām ²²⁾ | 第8段 (69.4-12) |
| 第5段 | マーリク・ディーナール Mālik-i Dīnār | 第4段 (49.4-56.15) |
| 第6段 | ムハンマド・ワースィウ Muḥammed-i Vāsi' | 第5段 (57.4-17) |
| 第7段 | アブドゥッラー・ムバーラク 'Abdu'llāh-i Mubārek | 第15段 (211.4-221.1) |
| 第10段 | イマーム・アアザム Īmām-i A'zam | 第18段 (240.3-248.5) |
| 第11段 | イマーム・シャーフィイー Īmām Šāfi'ī | 第19段 (249.10-250.23) |
| 第12段 | イマーム・アフマド・ハンバル Īmām Aḥmed-i Ḥanbel | 第20段 (256.5-257.12) |
| 第14段 | ムハンマド・アスラム・トゥースィー Muḥammed-i Eslem-i Tūsī | 第25段 (287.5-289.18) |
| 第15段 | アフマド・ハルブ Aḥmed-i Ḥarb | 第26段 (290.6-15) |

これらの段で取り上げられている人物は、後継世代 (tābi'ūn) に属するウワイズ・カラニー (657年没) やマーリク・ディーナール (748/49年没) から、9世紀中頃に没したアフマド・ハルブ (849年没) や法学者アフマド・ハンバル (855年没) までを含んでいる。明らかにナヴァーイーは、ジャーミー作品で取り上げられていないこれら最初期の聖者たちを、『聖者伝』の内容に基づき自分の作品の最初の部分に組み入れたのである²³⁾。

なお上記以外に、第100段ユースフ・ビン・フサイン・ラーズィー Yūsuf b. el-Ḥüseyn-i Rāzī の後半に収められているニーシャープールのスーフィーと商人の愛妾の物語 [Nes. 59.11-60.5] もジャーミー作品中の対応する第92段には見られないものであるが、物語の内容は『聖者伝』の同じ人物を取り上げた第37段 [TA 386.10-387.14] に見られるものとはほぼ同一であり、これに由来している可能性がある²⁴⁾。

3 インドの導師たちに関する情報

序文において言及されているシャイフ・ファリード・シャカルガンジは、『友愛のそよ風』本文では第527段で取り上げられている。以下第562段のシャイフ・シャーデー Seyḥ Šādī までの合計36段がジャーミー作品と対応せず、ナヴァーイーによって追加されたもの

↘ の綴り字 'Ajāmī に従ってカナ表記する。

- 22) 校訂本ではこのように写されているが、カナ表記はより一般的な 'Utba bin al-Ġulām に従う。
- 23) ちなみに第8段アブー・ハーシム・スーフィー Ebū Ḥāšim eṣ-Šūfi'ī と第9段ズンヌーン・ミスリー Zu'n-nūn-i Miṣri'ī はそれぞれ『親愛の息吹』の第1段および第2段による。第13段イマーム・マーリク Īmām Mālik についてはⅢ-6を参照。
- 24) ただしナヴァーイーはこれをムハンマド・タバードガーニーから聞いた話として紹介している: Bu fakīr özüm bu naqlı Kāšif-i 'ulūm-i rabbānī Mevlānā Muḥammed-i Tebādegānī kuḍḍise sırruhudın işittim [Nes. 59.9-10]。一方エラスランは『友愛のそよ風』のインドの聖者たち (Ⅲ-3参照) に関する情報の多くがアッタールの『聖者伝』から取られたとしている ([Nes. XXIX]) が、無論誤りである。

と見られる。各段の人物を同定することは本稿の範囲を越えるが、しばしば「インドの導師 Hind meşâyihı」として紹介されていたりインドの地名への言及が見られることから²⁵⁾、これら36段が「インドの導師たちの部」を構成すると判断できる²⁶⁾。

この部分の挿入位置は、第526段シャイフ・ニザームッディーン・デフラウィー・ハーリデー Şeyh Nizāmu'd-din-i Dihlevi el-Hālidī の直後であるが、この人物もまた「インドの導師の有名な人物のひとり」[Nes. 325.4], [Naf. 505.13]とされていることから²⁷⁾、ナヴァーイーは新たに加えられる部分の配置を決める際に内容面での関連を考慮したことがわかる。

4 チュルクの導師たちおよびジャーミーの同時代人に関する情報

ファリード・シャカルガンジの段がナヴァーイーによる「インドの導師たちの部」を開始していたように、アフマド・ヤサヴィーを取り上げた第611段も新たな付加部分の最初に置かれている。興味深いことに、第711段まで続くこの部分は「インドの導師たちの部」の直後ではなく、さらに40段あまり後に位置している。すなわち、ジャーミーによる原作の段数で言えば、インドの導師たちの部が第519段と第520段との間に挿入されているのに対し、ここで取り上げる部分は第569段と第570段との間に置かれた形である。またアフマド・ヤサヴィーの段と直前の第610段シャイフ・シハーブッディーン・スフラワルディー・マクトゥール Şeyh Şihābu'd-din-i Suhreverdi-i Maqtūl との間に内容面での関連は認められない²⁸⁾。一方でこの追加部分は、本編の最後にあたる詩人たちの部(Ⅲ-5参照)に先行している。従って作品全体の構成から見るならば、アフマド・ヤサヴィー以下の部分は本編中で詩人以外の聖者を取り上げた部分の最後に付加されたと考えてよいだろう。

25) 「インドの導師の有名な人物のひとりである」(第528段マウラーナー・ファフルッディーン・ザーヒド Mevlānā Fahrū'd-din-i Zāhid, [Nes. 327.16]), 「30年近くデリーの内城から出なかった」(第557段マウラーナー・ニザームッディーン・カラーミー Mevlānā Nizāmu'd-din-i Kelāmī, [Nes. 339.21-22]), 「インドの国 Hind mülki の導師のひとりである」(第561段マリク・ナスィールッディーン・マフムード Melik Naşirū'd-din Maḥmūd, [Nes. 342.9]) など。

26) Brockelmann 1952: 221 も同様に「36名のインドの神秘家」としている。ただし第544段が「40名のアブダール」Kırk Abdāl と題されていることを考慮に入れるならば、取り上げられている人物の総数は36名よりも多いことになる。

27) ちなみにその前の第525段でもシャイフ・バハーウッディーン・ザカリーヤー・ムルターニー Şeyh Bahāu'd-din Zekeriyā-i Multānī という(広義の)インドの地名に由来するニスバをもつ人物が取り上げられている。

28) この人物は1191年に処刑されたヤフヤー・ビン・ハバシュ Yaḥyā b. Ḥabeş [Nes. 382.18], [Naf. 584.21] であり、一部の資料でアフマド・ヤサヴィーの師とされる[cf. DeWeese 2012, VI: 189; IX: 412] シハーブッディーン・ウマル・スフラワルディー(1234年没)とは別人である。『親愛の息吹』はアフマド・ヤサヴィーをユースフ・ハマダーニー Yūsuf Hamadānī (1141年没)の弟子としており[Naf. 382.19-22], ナヴァーイーもこれに対応する第441段とアフマド・ヤサヴィーの段とで同じ立場を示している[Nes. 231.29-232.4; 383.12]。

アフマド・ヤサヴィーを「トルキスターンの国の導師たちの導師である」*Türkistân mülkniñ şeyhul-meşâyihidur* [Nes. 383.9] として紹介する第 611 段に続いて、まず第 612 段から 614 段ではヤサヴィーの弟子たちが、続く第 615 段からはそのひとりであるイスマーイール・アタ İsmâ'il Ata²⁹⁾の子孫たちが取り上げられている。『友愛のそよ風』の他の部分にも見られる、道統ごとにまとめて記述する方式がここでも用いられていると仮定すると、第 644 段ハージー・シャイフ Hâcî Şeyh³⁰⁾までがヤサヴィー統の人物にあてられていることになる。その中には、「その名声はチュルクの人々の間できわめて大である」*Şöhreti Türk ili arasında be-gâyet köptür* [Nes. 386.15] として紹介されている第 624 段イギト・アフマド Yigit Aḥmed のように、「チュルクの人々」との関わりが明記されている人物も含まれていることが注目される³¹⁾。

それに続く第 645 段アディーブ・アフマド Edib Aḥmed は、チュルク語で書かれた『真理への敷居』*'Atabat al-ḥaqā'iq* の著者として知られる人物である³²⁾。ヤサヴィー統との関わりは述べられていないが、「(彼も) またチュルクの出自であったようだ」*Hem Türk ilidin irmiş* [Nes. 390.24]、「チュルクの言葉で説教・説諭を語ったということだ」*Türk elfâzı bile mevâ'iz ü neşâyihka güyâ irmiş* [Nes. 391.11] とある。

このアディーブ・アフマドや、それに先行するヤサヴィー統の人物たち（少なくともその大部分）が「チュルクの導師」としてここに配されていることは疑いない。しかしチュルクの導師たちの部が実際にどの段まで続いているのかは明確ではない³³⁾。「チュルクの出自である」*Türk ilidindür* という表現がこの後第 694 段ババ・ハーキー Baba Hâkî まで見られないことは、この間の人物がチュルクの人々ではなかったことを推定させる。また第 656 段シャイフ・サンアーン Şeyh Şan'an および第 657 段ミール・カーリーズ Mir Kârîz は、どちらもアッタールの作品中で言及されている人物として紹介されており³⁴⁾、「チュルクの導師」と見なされたとは考えにくい。一方これらに続く第 658 段から第 711 段までで取り上げられている人物については、しばしばナヴァーイーとの個人的な関係への言及が見ら

29) イスマーイール・アタはヤサヴィーの弟イブラーヒム・アタの息子であるという：İbrâhim Ata atlıg inisiniñ oğlıdur [Nes. 384.26]。

30) 第 622 段サドル・アタ Şadr Ata の子孫として紹介されている。サドル・アタの系統については書かれていないが、別史料によればヤサヴィーのひ孫弟子にあたるという。DeWeese 2012, II: 179-181; IX: 395 を参照。

31) 他には第 619 段コルクト・アタ Korkut Ata, 第 620 段アリー・アタ 'Ali Ata, 第 623 段フッピー・ホージャ Ḥubbî H'âce, 第 641 段ゼンギー・アタ Zengî Ata に対して同種の表現が用いられている。

32) ただし『友愛のそよ風』ではこの著作への言及は見られない[cf. 菅原 1998: 126]。

33) Brockelmann 1952: 222 は「86 名のチュルクの導師」とするが、その数字の根拠は不明である。エラスランは、作品全体で「140 名ほどのチュルクの導師の生涯を増補」[Nes, XL, fn. 18] としているが、明らかに多すぎる数字である。

34) 両人物については Ritter 2003: 400-401; 178, 619, 黒柳 2012: 51ff.; 163 を参照。

れる。

この卑しい者に対して多くのご厚意があった。bu haķir bile kōp iltifātı bar irdi (第 658 段 シャイフ・シャー・ズィヤラトガーヒー Şeyh Şāh-i Ziyāretgāhī, [Nes. 396.19-20])

この卑しい者のために何度もファーティハを唱え祈りを捧げてくれている。Bu haķir bāreside kōp katla Fātihalar oqup hayr du'āsı kılıpdurlar (第 676 段 ホージャ・アウハド・ムスタウフィー H'āce Evḥad-i Müstevfī, [Nes. 404.18-19])³⁵⁾

さらに第 659 段 マウラーナー・ムハンマド・タバードガーニー Mevlānā Muḥammed-i Tebādegānī や第 710 段 マウラーナー・シャラフッディーン・ヤズディーン Mevlānā Şerefü'd-dīn-i Yezdī などのように、ナヴァーイーの詩人伝である『珠寶の集い』*Majālis al-nafā'is* の第 2 部 [Mec. 34-35; 31-32] で取り上げられていることから³⁶⁾、やはりナヴァーイーとの個人的な交流が確認できるものも見られる。また第 664 段 マウラーナー・ハージー Mevlānā Hācī では、40 年近くジャーミーに仕えていたことが述べられている [Nes. 399.18-19]。これらのことから判断するならば、第 658 段以降の部分は「チュルクの導師」としてではなく、同じく序文で言及されていた「ジャーミーの仲間や同時代の導師たち」を紹介する意図で加えられたものと見るべきである³⁷⁾。

結局、全 101 段からなるこの付加部分は、ヤサヴィー統に代表される「チュルクの導師たち」と、ナヴァーイーやジャーミーの周りにいた同時代の人々に関する情報とを主体としながらも、そのどちらにも属さない人物をも含む多様な内容をもつものとなっている。

5 詩人たちの部への追加

『親愛の息吹』では、本編の最後 [Naf. 593.9-612] に詩人たちの部が置かれており、そこではサナーイー Ḥakīm Sanāyī Ġaznawī (1134 年没) からハーフィズ Šams al-dīn Muḥammad al-Ĥāfiẓ al-Šīrāzī (1390 年頃没) に至る 13 名のペルシア語詩人が紹介されている。ナヴァーイーはこの部分にもいくつかの興味深い追加を行っている。

追加されているのは、第 719 段 マフムード・チャブシュタリー Şeyh Maḥmūd-i Çebüşterī, 第 727 段 ナースィル・フスラウ Seyyid Nāsır-i Ḥusrev, 第 728 段 アーザリー Şeyh

35) その他の例：第 660 段 [Nes. 398.17-18], 第 662 段 [Nes. 399.5-6], 第 665 段 [Nes. 400.8-9], 第 669 段 [Nes. 401.16-17], 第 674 段 [Nes. 403.17-18], 第 675 段 [Nes. 404.4-5], 第 703 段 [Nes. 413.11] など。

36) 『珠寶の集い』第 2 部では、ナヴァーイーが少年・青年時代に交流をもった人物が紹介されている。『珠寶の集い』の構成については近藤 2009: 44-45 を参照。またタバードガーニーについては註 24 も参照。

37) ただし第 694 段 ババ・ハーキー Baba Ḥakī はティムール時代、第 701 段 ババ・アリー・パーイヒサーリー Baba 'Alī-i Pāy-i ḥiṣārī はシャー・ルフ時代の人物であることが述べられており、ともにナヴァーイーやジャーミーの同時代人ではありえない。

Āzeri, 第 729 段ルトゥフィー Mevlānā Luṭfi, 第 730 段ムキーミー Mevlānā Muḳīmī, 第 731 段アシュラフ Mevlānā Eşref, 第 732 段ナスィーミー Seyyid Nesimī, 第 733 段イマードウツディーン・ファキーフ Şeyḫ 'Imādu'd-din-i Faḳīh および第 735 段ジャーミー Şeyḫul-islāmī ve Maḥdūmī Nūru'd-din 'Abdu'r-raḥmān-i Cāmī の計 9 段である。

第 719 段では、その著作のひとつであるマフムディー『秘密の薔薇園』*Gülşen-i rāz* に触れ、これがミール・フサイニー Mir Hüseynī からよせられた質問への回答として書かれたものであることが述べられている [Nes. 427.19-25]。ミール (アミール)・フサイニーは先行する第 718 段の人物であるが、そこではマフムード・チャブシュタリーに質問を送ったことには触れられていない。一方、同じ人物を取り上げた『親愛の息吹』の第 576 段にはこれに関連する短い記述が見出される³⁸⁾。以上から判断すれば、第 719 段は直前の段からこの人物に関するエピソードを取り出し、他の情報を補うことで構成されたものと考えられる。なお『親愛の息吹』エディションの後注 [Naf. 921.24] でも指摘されているように、この人物は『秘密の薔薇園』の作者として知られるマフムード・シャビスタリー Maḥmūd Şabistārī (1340 年没) のことであると考えられる。

その他の追加された段は、ジャーミーの段を別とすれば、いずれも原作で「詩人たちの部」の最後に位置するハーフィズの段の前に挿入された形になっている。まず第 727 段では有名なナスイル・フスラウ (1072-77 年あるいは 1088/89 年没) が紹介されている。続く第 728 段のアーザリーと第 731 段のアシュラフはともに『珠寶の集い』第 1 部 [Mec. 10-11; 12-13] で取り上げられている詩人である。引用されている詩行 [Nes. 435.27; 437.14] はどちらもペルシア語によるものである³⁹⁾。

第 729 段のルトゥフィーと第 730 段のムキーミーは、『珠寶の集い』第 2 部 [Mec. 66-67; 69] のほか、『2 つの言語の裁定』 [Muh. 188] や同じくナヴァーイーによる『サイド・ハサン・ベグ伝』*Hālāt-i Sayyid Hasan Beg* [Erarslan 1971: 94] でも言及されている詩人である。『友愛のそよ風』 [Nes. 436.14-15, 23-24; 437.4-5] では前者のペルシア語対句とチャガタイ語対句、後者のチャガタイ語対句が引用されている⁴⁰⁾。

第 732 段では西方のチュルク語詩人であるナスィーミー (ネスィーミー, 1417/18 年没)

38) 「シャイフ・マフムード・ジャブスタリー (sic) が回答を述べ、『秘密の薔薇園』の基となった韻文による質問も、彼 [アミール・フサイニー] の作のひとつである」*su'ālāt-i manzūm - ki Şayx Maḥmūd Jabustārī az ān jawāb gufta ast wa banā-yi kitāb-i Gülşen-i Rāz bar ān ast - nīz az ān-i way ast* [Naf. 603.8-9]。

39) 『珠寶の集い』でも両者のペルシア語の詩行があげられており、アーザリーの段の最初の対句は『友愛のそよ風』のものと同様である。

40) 引用されているルトゥフィーのチャガタイ語対句は『ルトゥフィー詩集』299 の最初の対句 [Karaağaç 1997: 219] と一致する。『珠寶の集い』でもルトゥフィーからはチャガタイ語の対句とペルシア語の対句が 2 句ずつ引かれている。ムキーミーの段では『友愛のそよ風』と同じ対句があげられている。なお『友愛のそよ風』のルトゥフィーの段は Rustamov 1963: 59-60, 87 でも取り上げられている。

を取り上げていることが特に注目される。ナスィーミーの作品がナヴァーイーの周囲で知られていたことは、ナヴァーイーの『パフラワーン・ムハンマド伝』 *Hālāt-i Pahlawān Muḥammad* の記述 [Eraslan 1980: 115-116] からもうかがえるが、この段では「ルームとトルクメンの言語で詩を詠んでいる」 *Rūmī ve Türkmenī til bile nazm aytıpdu* [Nes. 437.16-17] ことや、異端の嫌疑により皮をはがれて刑死したこと [Nes. 437.20] などが述べられ、チュルク語の詩行が2対句引用されている [Nes. 437.22-23, 25-26]。これらはバリ写本 [P148b25] で見る限りチャガタイ語の正書法で表記されている⁴¹⁾。

第733段イマードウッディーン・ファキーフ (1371/72年没) ではハーフィズとの関係を物語る逸話が紹介されており [Nes. 438.2-22]、続くハーフィズの段とのつながりを考慮して配置されていると考えられる⁴²⁾。最後の第735段はジャーミーにあてられており、その生涯や著作について述べた後、神への祈願でこの部分が閉じられている。

以上のように、この部分はチュルク語詩人とペルシア語詩人の両方を含み、また時代的にも12世紀に没したサナーイー⁴³⁾からナヴァーイーと同時代のジャーミーまでにわたっていることから、規模は小さいものの『珠寶の集い』に並ぶナヴァーイーの「もうひとつの詩人伝」として特に注目に値する。

ところで、前節で見たチュルクの導師たちや同時代人を含む追加部は第711段までであったが、詩人たちの部を開始するサナーイーは実は第714段である。両者の間に位置する第712段シャイフ・アウハドウッディーン・ハーミド・キルマーニー *Şeyḥ Evḥadu'd-din Hāmid el-Kirmāni* (1238年?没) および第713段ミール・サイイド・カースィム・タブリーズィー *Mīr Seyyid Kāsim-i Tebrīzi* (1433年没)⁴⁴⁾ は、ジャーミーの原作ではシャイフ・シハーブッディーン・スフラワルディー・マクトウールの直後に置かれていたが、『友愛のそよ風』ではこの位置に第611段アフマド・ヤサヴィーに始まる部分が挿入されたために、本来の先行する諸段から切り離された形となった。その理由として考えられるのは、この両名の詩作に対する評価である。

シャイフ・アウハドウッディーンには、マスナヴィーやその他の優美な詩作がある。

Şeyḥ Evḥadu'd-din'niṅ (...) *laṭīf eṣ'arı bar, meṣnevidin ve anıṅ ğayrıdın* [Nes.

41) 今回参照できたナスィーミー詩集のテキストにこれらと完全に一致する対句は見出されなかったが、最初の対句はガザル第90番 ([ND 130-131]) の冒頭と、2番目の対句は同じガザルの第9対句の前半+第5対句の後半とそれぞれ比較することができる。所有接尾辞2人称単数-(U)ḡ (cf. チャガタイ語 -(X)ḡ) が古アナトリア・トルコ語の特徴を示す一方で、*bol-*「ある、なる」や *tiri (teri)*「皮」はチャガタイ語の形式と一致する (cf. 古アナトリア・トルコ語 *ol-*, *deri*)。

42) この人物とハーフィズとの関係については Schimmel 1979: 254-255 を参照。

43) 『友愛のそよ風』のエディションは「サナーイー」の最初の子音を S ではなく S で写しているが [Nes. 419.23]、同様の綴りはナヴァーイーの『心に愛されるもの』 *Mahbūb al-qulūb* でも指摘されている [久保 2008: 220, fn. 55]。一方バリ写本 [P144a6] では通常の綴り字である Sanā'i が確認される。

44) カースィム・アンワール *Qāsim Anwār* として知られる人物である。

417.11-12]⁴⁵⁾

この方 [ミール・サイイド・カースィム・タブリーズィー] には詩集があり、よいマスナヴィーの書もある。Alarñıñ (...) dīvānları bar ve yaħşı meşnevi risāleleri [Nes. 419.12-13]⁴⁶⁾

このような評価のために、この2名はナヴァーイーによって詩人たちの部に含まれるものとして扱われたのであろう。ただし元々サナーイーの段のすぐ前に位置していたため、配列自体は変更されなかった。

6 その他

その他、ジャーミーの原作にもアッタール『聖者伝』にも含まれていない項目として次のものがあげられる。

第13段 イマーム・マーリク Īmām Mālik

第461段 マウラーナー・カースィム Mevlānā Kāsım

第479段 パフラワーン・マフムード・パッカヤール Pehlevān Maħmūd-i Pakka-Yār

第600段 ミール・ギヤース Mīr Ġiyās

第770段 パンバチャ・ムナヅジマ Penbeçe-i Mūneccime

第13段のマーリク (マーリク・イブン・アナス Mālik ibn Anas, 795年没) は、先行する第10段から第12段に述べられているアブー・ハニーファ (767年没)、シャーフィイー (820年没)、アフマド・ハンバル (855年没)⁴⁷⁾ と並ぶスンナ派四大法学派の祖としてここに置かれたのは明らかである。内容は非常に簡潔で、その法学派が四大法学派のひとつとして普及していることを述べるにとどまっている。

第461段マウラーナー・カースィム (1486年没) は、その師であるホージャ・ウバイドゥッター Hāce 'Ubeydu'llāh を取り上げた第460段のすぐ後に置かれている。ここではナヴァーイー自身との関わりやジャーミーによるその評価が述べられているほか、ホージャ・ウバイドゥッターの病を自らに「引き受けて」死んだこと⁴⁸⁾についても触れられている [Nes. 258.16-24]。

残る3名がそれぞれの位置に置かれている理由は不明である。校訂本の校異 [Nes. 274 fn.] によれば、第479段パフラワーン・マフムード・パッカヤールは3つの写本で欠けているという。またこの段は、第472段から始まるシャイフ・ナジュムッディーン・クブラー Şeyh Necmūd-din-i Kübrā およびその道統に連なる人物たち⁴⁹⁾の途中に割り込んだ形であ

45) =xidmat-i Šayx Awħad al-din rā nazmhā-yi laṭif ast, az maşnawi u gayruhu [Naf. 589.11]

46) 『親愛の息吹』にはこれに対応する部分がない。

47) これら3段の内容はいずれもアッタール作品に基づく。Ⅲ-2 参照。

48) この逸話については川本 2005: 95-96 を参照。

49) 詳しくは DeWeese 2012 第 V 章 を参照。

り、もしパフラワーン・マフムード・パッカヤールがこの道統と無関係であれば場違いな配置ということになる。なお第524段マウラーナー・ザヒールッディーン・ハルワティー Mevlānā Zahīrū'd-din-i Ḥalveti には、パフラワーン・マフムード・パッカヤールがこの人物と同時代人であったことが記されている⁵⁰⁾。第770段パンバチャ・ムナジマ⁵¹⁾は女性の聖者たちの部の最後に置かれている。パリ写本 [P154a 欄外] には Bibīca-i Munajjima と書かれているが、これはタシュケント版 ([Nasoyim]) の Bibichai Munajjima と一致する。Penbeçe は誤読によるものである可能性がある⁵²⁾。

IV 『友愛のそよ風』の背景

以上の検討から明らかなように、『友愛のそよ風』は原作の内容を翻訳によってそのまま再現したものではなく、記述の対象とする範囲を時代や地域・出自の面で拡大することにより独自の性格をもつ作品となっていた。その際に「チュルクの導師たち」についての情報を加えていることは確かに注目されるものの、それが最も顕著な特色であったと見なす理由は見当たらなかった。それでは、このような一連の改訂にはどのような意図や背景があったと考えられるだろうか。

よく知られているように、ジャーミーの『親交の息吹』はアンサーリー Abū Ismā'il 'Abd Allāh bin Muḥammad al-Anṣārī (1089年没) に帰されるペルシア語の『スーフィーの諸世代』 *Ṭabaqāt al-Šūfiya* に基づいている。さらにジャーミーは『親交の息吹』の序文において、『スーフィーの諸世代』がスラミー Abū 'Abd al-Raḥmān Muḥammad bin al-Ḥusayn al-Sulamī (1021年没) のアラビア語による同名作を先行作品としていることも主張している⁵³⁾。一方同じ序文の中でジャーミーはアンサーリー作品について、古いヘラートの言語 (zabān-i harawī-i qadīm) で書かれていること⁵⁴⁾、筆写者による誤りが混入していること、アンサーリー自身とその同時代人や後代の人物についての記述が欠けていることなどを指摘し、難解な表現を同時代のものに改めたり、取り上げられていない人物についての項目を加えるなどの改訂が必要であると述べている⁵⁵⁾。

50) Pehlevān Maḥmūd-i Pakka-Yār mu'āşırı irdi [Nes. 323.30], Pahlawān Maḥmūd Pakka-Yār mu'āşir-i way būda [Naf. 504.8-9]。なおマウラーナー・ザヒールッディーン・ハルワティーの没年は800年 [1397/98年] とされている ([Nes. 324.8], [Naf. 504.17])。

51) アラビア語 *munajjima* は「(女性の) 占星術師」を意味する。

52) Brockelmann 1952: 222 は Bičā'i Munagğima としている。

53) Naf. 1.8-2.5 および Bertel's 1965: 179-180, 244-245, Mojaddedi 2000: 195; 2001: 166-169。ただし実際の両作品の関係およびペルシア語の『スーフィーの諸世代』の成立については Mojaddedi 2001: 70-79, 85-96 を参照。

54) 『スーフィーの諸世代』に見られる「古いヘラートの言語」要素を扱った近年の研究に矢島 2007 がある。

55) Naf. 2.5-14 および本稿註 53 を参照。実際にジャーミーはこのような観点からの改訂を行った。

ジャーミー作品のこのような背景をナヴァーイーも共有していたことは、ジャーミーへの追想のために書かれた『驚きの五部』 *Xamsat al-mutaḥayyirin* の中で『親交の息吹』に触れた際に、それまでに書かれた同じジャンルの著作としてアンサーリー、アッタールおよびスラミーの作品をあげていることから窺える [Abik 2006: 48]⁵⁶⁾。すなわち、ナヴァーイーの『五部作』がニザーミーからジャーミーに至るペルシア文学の伝統を踏まえていた [菅原 2002: 58; 2009: 140] のと同じように、『友愛のそよ風』ではスラミーからアンサーリーを経てジャーミーへと続く伝統の新たな継承が意図されたのであった。そのためにナヴァーイーは、上で述べたジャーミーによるアンサーリー作品の改訂方針に倣って、これと同じ発想により『親交の息吹』に手を加えたと考えられる。ジャーミーとナヴァーイーの、それぞれが範とした作品の著者に対する態度の共通性は、両作品の序文の最後の部分に見られる断り書きに象徴的に表れている。

『親交の息吹』

Şayx al-islām, Abū Ismā'il, 'Abd Allāh al-Anşārī al-Harawī - qaddasa Allāh sirrahu, wa har jā ki dar in kitāb Şayx al-islām mazkūr şawād murād išan x"āhand būd [Naf. 25.4-5] シャイフルイスラーム、アブー・イスマーイル・アブドゥッラー・アンサーリー・ハラヴィー —— アッタールがその秘密を聖化されますように ——、本書において『シャイフルイスラーム』とある場合には、旨趣はかの御方である。

『友愛のそよ風』

Muṭāla'a ehliḡa ma'lūm bolsun ki *Nefeḡāt* düstürü bile bu kitābda Şeyḡu'l-islām her yirde ki mezkūr bolur, andın maqşūd Ḥāzret-i Ḥ'āce 'Abdu'llāh-i Enşārī kuḡdise sırruhudur ve Ḥāzret-i Maḡdūmī her yirde ki merḡūm bolur, Cenāb-i Maḡdūmī nuvvire merḡaduhu nürendür [Nes. 12.10-14]

読者に了解されたい：『親交の息吹』の方式により、本書において『シャイフルイスラーム』とある場合には、その意図はホージャ・アブドゥッラー・アンサーリー猊下 —— その秘密が聖化されますように —— であり、『ハズラティマフドゥミー』と書いてある場合には、マフドゥミー殿 [ジャーミー] —— 御墓が光に照らされますように —— のことである。

このように、ナヴァーイーによる『友愛のそよ風』の執筆は、『親交の息吹』という一作品の翻訳・改訂ということを超えて、先行作品を元に『親交の息吹』を生み出したジャー

⁵⁴⁾ と考えられている：‘This account of his methods of redaction corresponds largely to the conclusions reached by a comparison of the two works’ [Mojaddedi 2001: 168].

56) ただしそこでアンサーリーの作品について、導師たちを「5つの世代に分け、20名づつを1つの世代にしている」anı biş ṭabaḡa kılıp her yigirmine bir ṭabaḡa kılıpturlar とするのはナヴァーイーの誤りで、これはスラミー作品の構成である。なおこれに続く部分 [Abik 2006: 49-50] では『親交の息吹』の序文の一部 [Naf. 2.15-3.1] がペルシア語のまま引用されている（若干の相違が見られる）。

ミーの文学活動そのものを、自らの次元で再現するという意味をもっていたのである。

V ナヴァーイーの翻訳文体

本稿の最後に、補足として『友愛のそよ風』における語彙の選択について少し触れておきたい。よく知られているように、チャガタイ語にはペルシア語・アラビア語起源の語彙が大量に導入されていたため、あるペルシア語の文を、語彙的な要素、特に名詞・形容詞を保ったままチャガタイ語に置き換えることが可能であった（1行目＝『友愛のそよ風』、2行目＝『親交の息吹』。太字は引用者による）。

hod-rūy direht kim anı **perverde** kılmamış bolğaylar, **berg** çıkarğay, **velī bār** birmegey, **dīraxt-i x^wad-rōy** ki kasē ānrā **naḡarwarda** bāšad **barg** bar-ārad **walē bār** nayārad,

（人が）育てたのではない野生の木は、葉を出すだろう しかし実をもたらさない、

birse dağı **mezesi** bolmağay [Nes. 184.27-29]

*wa aḡar ārad bē-**maza** ārad* [Naf. 298.3-4]

もたらしても味がないだろう

上の例では、チャガタイ語文中の名詞・形容詞（および接続詞 *velī*）はすべてペルシア語原文に由来する語彙が用いられている。原文の内容を過不足なく再現するためにはこれが最も合理的な方法であるのは言うまでもない。その一方で、『友愛のそよ風』にはあえて原文と異なる語彙を選択している例もしばしば見出される。

A.

müşkil irdi 「困難であった」 [Nes. 193.20] = dušwār šud [Naf. 312.19]

bir kabr başıda 「ある墓の前で」 [Nes. 217.9] = bar gōristān [Naf. 356.1]

Müte'emmil boldı 「思案に暮れた」 [Nes. 224.15] = andēša-nāk šud [Naf. 364.18]

'Ala-ş-şabāh 「朝に」 [Nes. 250.16] = bāmdād [Naf. 403.2]

bu fakīr 「この貧しき者」 [Nes. 283.24-25] = in bēčāra [Naf. 445.13]

dünyā vü mā-fihānīng maḡabbeti 「現世とそこにあるものへの愛着」 [Nes. 348.20]

= dōsti-i dünyā u ānci dar dünyā st [Naf. 516.16-17]

B.

bu mūjde 「この吉報」 [Nes. 187.10-11] = in bašārat [Naf. 301.13]

kedḡudā bolmağandur 「結婚しないていた」 [Nes. 205.21] = muta'ahhil našuda bū [Naf. 330.8]

pervā kılmas irdi 「気にかけなかった」 [Nes. 310.11] = iltifāt namēkard [Naf. 474.20]

Ḥalvetiler gūristānidadur 「ハルワティーたちの墓地にある」 [Nes. 323.26-27]

= dar mazār-i Xalwatiyān ast [Naf. 504.6-7]

herāyine 「必然的に」 [Nes. 439.12] = lā-jaram [Naf. 612.6]

bir iski būriyā 「1枚の古い敷物」 [Nes. 445.19] = yak pāra ḥaṣīr-i kuhna [Naf. 618.10]
 A. ではペルシア語起源の語彙がアラビア語起源の語彙に置き換えられているのに対し、B. ではその逆のことが行われている。B. の4つ目の例ではアラビア語 *mazār* をペルシア語 *gūristān* (*gōristān*) で訳し、A. の2つ目の例ではそのペルシア語 *gōristān* をアラビア語 *qabr* (*qabr*) で訳していることからわかるように、ここになんらかの一貫した方針は見出しにくい。もし原文の内容のチャガタイ語による忠実な再現のみが意図されていたならば、このようなやり方を取る必要はなかったであろう。すなわち、ナヴァーイーは語彙の選択においても、原作の要素を常にそのまま引き継ぐのではなく一定の独自性を追求していたのである。このことは、『友愛のそよ風』が、作品の構成面だけでなく文体面でも、ペルシア語原作の単なる模倣にとどまらない、新たな可能性の試みという性格をもっていたことを意味する。ただしそこに、この文人に関してしばしば言及される、民族意識と結びついたペルシア語あるいはペルシア文学への対抗心のようなものがあつたかどうかについては、今後さらなる検討が必要である。

参考文献

- Mec.: Ali-Şir Nevayī, *Mecālisü'n-Nefāyis* I (Giriş ve Metin) /II (Çeviri ve Notlar). hazırlayan: Kemal Eraslan. Ankara 2001.
- Muḥ.: 'Ali Şir Nevāyī, *Muḥākemetü'l-Luḡateyn. İki Dilin Muhakemesi*. hazırlayan: F. Sema Barutçu Özönder, Ankara 1996.
- Naf.: Nūr al-dīn 'Abd al-Raḥmān Jāmī, *Nafahāt al-uns min ḥaḍarāt al-quds*. muqaddima, taṣḥīḥ u ta'liqāt: Maḥmūd 'Ābidī. Tehran 1370h.
- Nasoyim: Alisher Navoiy, *Nasoyim ul-muhabbat* (Mukammal Asarlar To'plami, O'n yettinchi tom). (http://navoi.natlib.uz:8101/uz/nasoyim_ul_muhabbat_un_ettinchi_tom/で公開)
- ND: *Nesimi Divanı*. yayına hazırlayan: Hüseyin Ayan. Ankara 1990.
- Nes.: Ali-şir Nevāyī, *Nesāyimü'l-Maḥabbe min Şemāyimi'l-Fütüvve*. I Metin. hazırlayan: Kemal Eraslan. Ankara 1996.
- P: MS. Bibliothèque nationale de France, Supplément turc 316, 22b-154a. (<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b84271998>で公開)
- TA: Şayx Farīd al-dīn 'Aṭṭār Nişābūrī, *Tazkirat al-awliyā'*. bar-rasī, taṣḥīḥ-i matn, tawdīḥāt u fahāris: Muḥammad Istī'lāmī. Tehran 1379h.
- Abik, Ayşehan Deniz (2006) '*Ali Şir Nevāyī, Ḥamsetü'l-Müteḥayyirin. Metin — Çeviri — Açıklamalar — Dizin*'. Ankara.
- Bertel's, Ievgenii Eduardovich (1928) Nevāi i 'Aṭṭār. In: V. V. Bartol'd (ed.), *Mir-Ali-Shir: Sbornik k Piatisotletiu so Dnia Rozhdenia*. Leningrad, 24-82.
- Bertel's, Ievgenii Eduardovich (1965) *Izbrannye trudy. Navoi i Dzhami*. Moscow.

- Brockelmann, Carl (1952) *Newā'is Biographien türkischer und zeitgenössischer Mystiker*. In: J. W. Fück (ed.), *Documenta Islamica Inedita*. Berlin, 221-249.
- Câmi, Abdurrahman, *Evlîya Menkıbeleri [Nefahâtü'l-Üns]*. Tercüme ve Şerh: Lâmiî Çelebi. hazırlayanlar: Süleyman Uludağ, Mustafa Kara. İstanbul 2011.
- DeWeese, Devin (2012) *Studies on Sufism in Central Asia*. Farnham.
- Eraslan, Kemal (1971) Nevâyî'nin «Hâlât-ı Seyyid Hasan Big» risâlesi. *Türkiyat Mecmuası* 16, 89-110.
- Eraslan, Kemal (1980) Ali Şîr Nevâyî'nin «Hâlât-ı Pehlevan Muhammed» risâlesi. *Türkiyat Mecmuası* 19, 99-164.
- Hagen, Gottfried (2003) Translations and translators in a multilingual society: a case study of Persian-Ottoman translations, late fifteenth to early seventeenth century. *Eurasian Studies* II/1, 95-134.
- Karaağaç, Günay (1997) *Lutfî Divanı. Giriş — Metin — Dizin — Tıpkıbasım*. Ankara.
- 川本正知 (2005) 『マウラーナー・シャイフとして知られる弟子編著 15世紀中央アジアの聖者伝 ホージャ・アフラルのマカーマート』(訳注) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 近藤信彰 (2009) ペルシア語詩人伝の系譜 韻文学の隆盛と伝播 森本一夫編著『ペルシア語が結んだ世界 —— もうひとつのユーラシア史 ——』北海道大学出版会, 39-65.
- Köprülü, M. Fuad (1965) Orta-Asya Türk dervişliği hakkında bazı notlar. *Türkiyat Mecmuası* 14, 259-262.
- 久保一之 (2008) ナヴァーイー (ミール・アリーシール) の社会観 —— *Mahbûb al-qulûb* 第1章日本語訳 (付. ローマ字転写校訂テキスト) —— 『京都大学文学部研究紀要』47, 183-295.
- 黒柳恒男 (訳) (2012) 『アッタール著 鳥の言葉 —— ペルシア神秘主義比喩物語詩 ——』平凡社.
- Levend, Ağâh Sırrı (1965) *Ali Şîr Nevai I. Hayatı, Sanatı ve Kişiliği*. Ankara.
- Mojaddedi, Jawid A. (2000) Jâmi's re-contextualization of biographical traditions 'The Biography of Anşârî in the framework of the *Nafahât al-uns*'. In: G. R. Hawting, J. A. Mojaddedi and A. Samely (eds.), *Studies in Islamic and Middle Eastern Texts and Traditions: in memory of Norman Calder*. Oxford, 195-211.
- Mojaddedi, Jawid A. (2001) *The Biographical Tradition in Sufism. The ṭabaqât genre from al-Sulamî to Jâmi*. Richmond.
- 二宮文子 (2011) 南アジアのペルシア語神秘主義文献『神秘の脈脈』近藤信彰編『ペルシア語文化圏史研究の最前線』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 113-127.
- Pistor-Hatam, Anja (1998) The art of translation. Rewriting Persian texts from the Seljuks to the Ottomans. In: *Essays on Ottoman Civilization: Proceedings of the XIIth Congress of the Comité International d'Études Pré-Ottomanes et Ottomanes*. Praha, 305-316.
- Ritter, Hellmut (2003) *The Ocean of the Soul: Man, the World and God in the Stories of Farid al-Din 'Attâr* (trans. by John O'Kane with editorial assistance of Bernd Radtke). Leiden · Boston.

- Rustamov, E. R. (1963) *Uzbekskaja Poezia v Pervoi Polovine XV. Veka*. Moskva.
- Schimmel, Annemarie (1979) Ḥāfīz and his critics. *Studies in Islam* 16, 253-285.
- 菅原 睦 (1998) チャガタイ・トルコ語の成立と文学的伝統 『神戸市外国語大学外国学研究 アジア言語論叢』 2, 121-138.
- 菅原 睦 (2002) チャガタイ文学とイラン的伝統 『総合文化研究』 5, 49-62.
- 菅原 睦 (2009) 中央アジアにおけるテュルク語文学の発展とペルシア語 森本一夫編著『ペルシア語が結んだ世界 —— もうひとつのユーラシア史 ——』北海道大学出版会, 131-14.
- 菅原 睦 (2011) 前古典期チャガタイ語文学における翻訳・翻案 近藤信彰編『ペルシア語文化圏史研究の最前線』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 31-59.
- 東長 靖 (編) (2012) 『オスマン朝思想文化研究 —— 思想家と著作 ——』京都大学イスラーム地域研究センター.
- Toska, Zehra (2000) İleriye yönelik araştırmalarla ilgili olarak Eski Türk edebiyatı sahasında yazılmış olan tercüme metinleri değerlendirmelerde izlenecek yöntem/ler ne olmalıdır? *JTS* 24/1, 291-306.
- 矢島洋一 (2007) アブドゥッラー・アンサーリー『スーフィー列伝』の特異語彙について 『オリエント』 50-2, 222-235.
- 矢島洋一 (2009) ペルシア語文化圏におけるスーフィー文献著述言語の変遷とその意義 森本一夫編著『ペルシア語が結んだ世界 —— もうひとつのユーラシア史 ——』北海道大学出版会, 67-95.

(東京外国語大学大学院総合国際学研究院)